



WCRR2019を 振りかえる

公益財団法人鉄道総合技術研究所
専務理事 渡辺 郁夫

第12回世界鉄道研究会議（WCRR2019）を2019年10月28日から11月1日にかけて東京国際フォーラムにおいて開催しました。WCRRは鉄道に関する研究の価値の向上、技術情報の共有、国際協力の推進を目的としています。第1回を1994年にパリで開催し、以降世界の各都市で開催してきており、日本で開催するのは1999年以来2回目です。

今回の会議テーマは「カスタマー・エクスペリエンスを高めるための鉄道研究」です。カスタマー・エクスペリエンスとは、お客様が鉄道を利用することで得られる良質な経験を示します。その向上のための取り組みとして各国の鉄道事業者、鉄道産業界、研究機関それぞれの組織の幹部によるパネルディスカッション、世界的に関心の高い自律運転やデジタル技術による予防保全などの分野のオーガナイズドセッション、サービス向上、持続可能性、安全・防災、車両、地上設備、境界領域などの分野の一般発表セッションを設定し、鉄道が抱える課題と取り組み、今後鉄道が進むべき方向などについて、活発な議論がなされました。37か国から993人（海外から424人）の参加者、353件（海外から240件）の論文発表があり、国際会議として十分な規模で開催できたと思います。今回はCBM（状態監視保全）に関する論文発表が多く、各国で鉄道のデジタル化を強く推進していると感じました。また、多数の論文発表に加え、ブース展示やテクニカルビジットの提供などにより、日本の鉄道技術のレベルの高さも十分にPRできたと思います。

WCRR2019の開催準備は東京開催が決まった2016年から始めました。会議の企画運営に関しては、主催組織である鉄道総研が原案を作成し、世界7組織のメンバーで構成する実行委員会での議論を経て組織委員会で最終決定する手順で進めました。会議テーマやプログラムに関しては激しい議論となることもありましたが、各委員の協力によりどうにか最終案をまとめることができました。一方、国内においては鉄道総研とJR7社からなるWCRR2019国内委員会を設置して日本の意見を集約するとともに、鉄道総研内にWCRR2019実施本部を設置して会議運営の詳細についての検討を行いました。そして最終的に、国土交通省、経済産業省、東京都、関連学協会等からのご後援、JR・公民鉄各社、鉄道関連企業などからの展示ブース出展やスポンサーとしてのご協力、テクニカルビジットのご提供などを得て、まさにオールジャパンでの会議を開催することができました。ご協力いただいた各組織の皆様、また、WCRRに参加いただいた皆様に深く感謝いたします。

次回は2022年6月にイギリスのバーミンガムでの開催となります。そのための組織委員会もすでに開催されており、次回WCRRにおいても鉄道研究の価値を高めるための活発な議論がなされ、未来の鉄道の共創の場として有意義な会議が開催されることを期待しています。